トゥルシー（薬草）の神話
Jalandhara and Vrinda ・The story of Tulsi

薬草トゥルシーの物語は、天界の王インドらからはじまります。

インドラ神は、神々の王でした。
しかし、もはや人々は彼をメインの神として敬いませんでした。
これは、彼を大変悩ませました。
彼は、人々が、ブラフマー神、ヴィシュヌ神、シヴァ神、を彼らの導き手として敬っていることを知っていました。インドラは彼が、ブラフマー神、とヴィシュヌ神に立ち向かうことができないことを知っていました。
彼らは、創造の神と維持の神でしたが、インドラには、
なぜ、人々が、破壊神であるシヴァ神を好むのか理解できませんでした。
インドラ神は、考えました。
「私が行って破壊神よりも優れていることを証明したら。人々は私をうやまうだろう。」
どちらにせよ、インドラ神は、誤解していました。

シヴァ神は、破壊の主であり、すべての悪とエゴの破壊者です。
インドラ神は、シヴァ神に会うために、まっすぐカイラス山に行きました。
シヴァ神は、瞑想の力で、インドラ神が自分に会いたがっていることを知っていました。

シヴァ神は、彼の軍団の一人の姿に変身して、門番として門の前に立ちました。

「中に入れてくれ、門番！」
インドラ神は、門番を見下して言いました。
『私は、すべての問題を解決するためにシヴァ神と話がしたい。』

門番が誰か理解することができませんでした。
門番は、面白そうに門番を見ました。
『どのような問題を解決するためにシヴァ神に会いたいのですか？』
インドラ神は、門番を見据ました。
「私は、私がシヴァ主よりも強力であることを証明したい。」
と言い、ヴァジュラを怒りで閃かせました。
門番は言いました。
『私は、シヴァ神を守ります。』
『なぜ、あなたは、はじめにあなたの力を私に見せないのですか？』

トゥルシー（薬草）の神話
Jalandhara and Vrinda ・The story of Tulsi

『もし、あなたが勝ったら、あなたは、シヴァ神に会うことができるでしょう。』
インドラは、怒っていました。しかし、誰かが公然と挑戦した場合に戦うことを拒否することができましたが、彼は、挑戦を受けました。
インドラ神と門番は戦いをはじめました。
門番は華麗に戦った。 インドラ神は、門番がますます怒っていくのを見ました。
門番は最終的に大きな力で彼を押し戻しました。
インドラは、シヴァ神の足元に倒れました。

インドラは起きようとしていました。
普通の門番では、天界の王インドラ神を追い払うことはできません。
「この門番は、誰だろう？」とインドラ神は考えました。
インドラ神は、門番こそがシヴァ神であることに恐れと共に気がつきました。
インドラ神が門番の足元からゆっくりと立ち上がると、
門番は、鋭い目で、インドラを睨みました。
インドラ神は、自分がすでに疲れたことに気がつきましたが、
シヴァ神は、まだ戦いをはじめてもいないかのように見えました。
インドラ神は、自分の力が、彼に及ばないことがわかりました。
インドラ神はゆっくりとシヴァ神の足元にひれ伏すと、許しを請いました。

「私はあなたがどれほどパワフルなのか分からなかった
...あなたは私の誇りを破壊した…」と言いました。

門番はしばらく怒りをもって、インドラ神を睨みつけていた。
門番は、目を閉じた。インドラ神には、門番が激しい怒りを抑えることに大きな困難を感じているように見て取れました。

インドラ神は、何かが門番から飛び出ていくのを見ました。
それは、何か激しく、赤く、燃えているものでした。

何かが、門番から飛び出ていった後、
主であるシヴァ神は、元の姿でインドラ神の前に現れました。
インドラ神は、シヴァ神の美しい姿を見ると、もう一度頭を下げて、許しを請いました。

トゥルシー（薬草）の神話
Jalandhara and Vrinda ・The story of Tulsi

主シヴァ神は、インドラ神に微笑んで言いました。

「インドラ神よ、あなたは私を非常に怒らせた..
　私は実際に私の第3の目を開き、あなたを灰に燃やすように
　怒りに誘惑されました...」

　インドラ神は、彼がどれほど彼自信の死に近く迫ったのかを
理解しながら震えました。

『しかし、あなたが私の足元に倒れたとき、許しを求めた...
そのため、私はあなたに恨みを抱くことはできなくなった。』と
シヴァ神は頭を振って言いました。

「しかし、私の怒りは別のものだった...」
インドラ神はシヴァ神を見て、不思議そうにに尋ねました。
　「あなたから出てきたものは何ですか、私の主よ」
シヴァ神は、インドラ神が理解できるかどうか
疑問に思いがら彼を見て言いました。

「それは私の怒りの人格化だった...
なぜなら、私はあなたを相手にそれを使用するつもりはなかったので
私は、私の怒りの神格を私自身から引き離した。
それは、今海の中にいる。」

インドラ神は、もう一度シヴァ神に許しをこうと自分の宮殿にもどっていきました。
しかし、それはインドラ神の問題のはじまりにすぎませんでした。

シヴァ神は非常に強力な神であり、彼の怒りは非常に強力でした。
彼のすべての怒りが海の波に沈んだとき、
怒りは、すぐに、小さな赤ちゃんの姿をとりました。
そして、その赤ちゃんは、泣き続けました。
創造の神、ブラフマーは、
その鳴き声を聞きつけ、やってきました。彼は、赤ちゃんをその腕に抱き上げました。
彼が見つけた赤ちゃんは非常に重かったのです。

トゥルシー（薬草）の神話
Jalandhara and Vrinda ・The story of Tulsi

ブラフマー神が赤ちゃんを抱き上げると、
赤ちゃんの小さな手は　ブラフマー神のひげを摘み取りました。
赤ちゃんは、すごい力で、ブラフマー神の髭を引っ張りました。
ブラフマー神は、泣きそうになりました。
ブラフマー神は、涙を拭きながら、赤ちゃんに言いました。
『あなたは、とても強い。私の目に涙を流させました。つまり、あなたの力は、水を私の目から流させたのです。』
『それで、私はあなたの名前を”ジャランダラ”と名付けました。』

ジャランダラは成長しました。彼は自分の力に誇りを持つようになりました。
彼はどんな者でも、彼の力で打ち負かすことができることを理解しました。
神々は、彼が神に味方になって、神々が彼の力を使うことができるようになることを望みました。
しかし、ジャランドラは、別の考えを持っていました。
それは、彼がアスラのリーダーになることでした。

ジャランドラが、結婚適齢期になったときに、、
彼は、大変強いアスラのもとに出かけて行きました。
アスラの名前は、『カラネミ』でした。
アスラ・カラネミは、ヴィシュヌ神の化身ラーマ神と
戦った大悪魔ラーヴァナの叔父でした。

アスラ・カラネミには、美しい娘　『ヴリンダ』がいました。
彼女は大変頭が良いうえに、ヴィシュヌ神の熱心な信者でした。
ヴリンダは、ジャランドラの強い力に魅了され、彼と結婚に承知しました。
そして、数日後に結婚しました。

ヴリンダはヴィシュヌ神の熱心な信者だったため、
膨大なヨガによるシッディ（超能力）がありました。
ヴリンダは、心から夫のジャランダラを愛していました。
彼女の愛の力で、ジャランダラは強力で無敵になりました。

アスラのグル『スクラーチャリヤ』は、ジャランダラが、ヴリンダと結婚した後、どんなに強くなったかに気がつきました。
そして、彼は、ジャランドラにアスラ王の王冠を授けることを決めました。

トゥルシー（薬草）の神話
Jalandhara and Vrinda ・The story of Tulsi

アスラたちも、力強いジャランドラに従うことを望みました。
すべての地上の王たちは、力強いジャランドラに打ち負かされました。
ジャランドラは、インドラの天国に目を向けました。
インドラ神と、その他の神々は、ジャランダラの計画に
気がつくことはありませんでした。

彼らは、ジャランドラの攻撃を受けた時に、大変驚いてしまいました。
そして、神々は、自分たちを守ることができませんでした。

神々は、どうして良いかわからなくなりました。
彼らには、最も強い武器バジュラがありましたが、
そのヴァジュラでも、ジャランダラを傷つけることはできませんでした。
すべての神々は、創造の神ブラフマーのもとに赴きました。

創造の神ブラフマーは、やってきた神々を見て、
ジャランドラの誕生の理由を説明しました。
『ジャランドラは、破壊の神シヴァの怒りから生まれてきました。
そのため、彼は、シヴァ神によってのみ、打ち負かされるでしょう。』
インドラは言いました。
「もし、我々がシヴァ神のもとに行って話をしたら、、、。
〜〜それは有効な手段だろうか？」

ブラフマ主は疑わしいと思ったが、彼はうなずいた。
「私達は彼に尋ねなければならないだろうが、ジャランダラはとても傲慢だ。
シヴァ神が、ジャランダラを納得させられるかどうかは、疑問だ。」
シャヴァ神は、神々の要請を受け、ジャランダラとの話し合いに向かった。

しかし、ジャランダラは、大変傲慢で、公然とシヴァ神を侮辱し始めた。
ジャランダラは、シヴァ神のように叫びました。
「あなたは、自分を禁欲者と呼んでいるが、、、。
　なんと図々しい！
　あなたが禁欲主義者なら、なぜあなたは妻が必要なのですか？
　女神パルヴァティを追い出してしまうべきです。
　あなたは妻を必要とせず、同時にヨギになるべきです。」

トゥルシー（薬草）の神話
Jalandhara and Vrinda ・The story of Tulsi

シヴァ神は、大変な忍耐を持って怒りを抑えさらに、ジャランダラと会話をしようとしました。しかし、ジャランダラは、ますます驕り高ぶって、シヴァ神との平和の話し合いを拒否しました。

シャヴァ神は、ご自身の宮殿のあるカイラース山に戻って、このことを神々に話しました。 シヴァ神は、「私はジャランダラを破壊する必要があることを恐れている。彼はあまりにも傲慢になってしまった。私はあなたを戦闘に導くだろう。」
神々は喜びました。 シヴァ神自身が自分たちを戦闘に導いた場合、彼らは勝利を保証されたと同じです。

しかし、翌日、シヴァ神は、ジャランダラが非常に強力であることを発見しました。 彼は体力も持ち合わせていて、錯覚の力も持っていました。
ジャランダラは、すべての彼の力を使い、シヴァ神とその軍団と神々を
捕まえる強力な錯覚を作りました。

攻撃を予期していないシヴァ神と他の神々は、
ジャランダラの作り出した幻影の中に、取り込まれているのに気づきました。

ジャランダラは、シヴァ神と他の神々が、自分の作り出した幻影に囚われたのを見ると、カイラス山へ赴きました。そして、シヴァ神の妻である女神パールヴァティ
を見つけると、ジャランダラは、彼の魔法でシヴァ神の姿に変身しました。

ジャランダラは、シヴァの姿を取って、女神パールバティーに会いに行きました。
そして言いました。
「パールヴァティ！私は、勝利して帰った。ジャランダラを打ち負かしてきた。」

女神パールバティーは、シヴァ神を見て、眉をひそめました。彼女は何かおかしいことに気がつきました。そして、女神パールバティーは目を閉じて超能力で、今自分の眼の前にいる者が、何者か、探りました。

彼女は、目を開けると怒って言いました。
「ジャランダラ！
　よくも図々しく、私の夫の姿を取ってきたものだ！」
彼女は立ち上がると、剣を取って刃をジャランダラに向けました。」

トゥルシー（薬草）の神話
Jalandhara and Vrinda ・The story of Tulsi

ジャランダラは、女神パールヴァティーが、シヴァ神と同等の非常に
強い戦士であることを知っていました。
彼は、自分の力が、幻影の力を使ったことで、すでに弱っていることを知っていました。
また、その力では、女神パールヴァティーと戦うことはできないと言う事もわかっていた
ので、その場から逃げて行きました。

ヴィシュヌ神がやってきたときに、女神パールヴァティーは、激怒して座っていました。
ヴィシュヌ神は言いました。
「どうしたんですか？　なにが問題ですか...？」
女神パールヴァティーは、すべての成り行きをヴィシュヌ神に話しました。
「なぜ、ジャランダラはそんなに、力があるのですか？」

ヴィシュヌ神は、言いました。
「ジャランダラは、大変強い。彼は、私の熱心な信者”ヴリンダと結婚したためです。
　彼が戦いに赴くときには、いつでも、ヴリンダは、私に祈りを捧げている。
　彼女は、沢山の力を彼女自身の祈りによって身につけている。
　そして、ジャランダラは彼女のおかげで、無敵になっている。」

女神パールヴァティーは、ヴィシュヌ神を見上げた。
ヴィシュヌ神は、困った様子で、女神パールヴァティーを見た。

「ヴィシュヌ神は、自分のするべきことを良く解っているが、そのようなことを、
彼自身の熱心な信者に対してすることができるだろうか？」
と女神パールヴァティーは思った。

ヴィシュヌ神は、嬉しくなさそうに、ご自分の宮殿のある
天国ヴァイクンダに戻っていった。
 彼は、自分がしなければならないことをする以外に選択肢がないことを知っていた....

次の日、ヴリンダは、自分の夫が、主シヴァ神との戦いを始めたことを知った。
彼女は、彼のために祈りはじめた。彼女が深く瞑想をしていたとき、
彼女は誰かが彼女の部屋に入るのを見た。
彼女は目を開き、彼女の目の前に夫を見つけ驚いた。
彼女はジャランダラが、彼女の前に来て、誇りを持って言った、

トゥルシー（薬草）の神話
Jalandhara and Vrinda ・The story of Tulsi

「'私はやり遂げた。私はシヴァ神を倒した...
　今や、私のように強い人は誰もいない。」
彼は、自慢げに言った。そしてヴィリンダのようにヴィシュヌ神に感謝した。
ヴリンダは、祈りをやめ、夫の勝利のための準備に取り掛かった。

シヴァ神とジャランダラは、戦いの最中にいました。
シヴァ神の三つ叉の槍＝トゥリシュールが、ジャランダラの胸を貫いたのは、
まさにその瞬間でした。

妻の祈りの力がなくなった時、シヴァ神の武器が彼の胸を貫き、
ジャランダラは、死にました。

ジャランダラの宮殿では、ヴリンダは彼女の夫を見て何か間違って感じました。
彼女は夫に悪いことが起こったと感じていました。
しかし、彼女の目の前にジャランダラは立っていました。

彼女は、彼女の前に立つジャランダラを見て言った、
「あなたは誰ですか？ あなたは私の夫ではありません。
　彼はどこですか？」
ヴリンダは涙を流しながら宮殿の周りを見た、
「私は私の祈りを止めてしまった。私の夫に何が起こったの？」
すると、ジャランダラはそこから消えて、彼の立っていたところには、
ヴィシュヌ神が立っていた。
しかし、ヴィシュヌ神はヴリンダを不幸な目と悲しい顔で見ていた。

ヴリンダはビシュヌ神を見、そして彼を睨んで、
「あなたは何をしましたか？ 私の夫は、どうなったのですか？」

ビシュヌ神は静かに話しました。「ジャランダラは死んでいます。」
ヴリンダは、大変悲しみました。ヴィシュヌ神は続けました。
「あなたの夫は、あなたの祈りのおかげで、無敵になっていました。
　あなたが彼のために祈っている限り、何も彼を倒すことはできませんでした。」

トゥルシー（薬草）の神話
Jalandhara and Vrinda ・The story of Tulsi

ヴリンダは、ヴィシュヌ神に叫んだ。
「私はあなたを信じていました。、しかし、あなたは、私を失望させた...
私は夫を愛しただけなのに、あなたは　私の信仰心を騙しました...
あなたは石のように立っていましたが、私の夫は戦いで死んでしまいました。
だから、私はあなたを呪う... '
ヴリンダは怒って言った、
「私はあなたを、石の中に閉じ込められるように呪う！」

ヴィシュヌ神は憂鬱な様子で頭をうなずきました。
'私はあなたの呪いを受け入れる。
しかし、覚えておきなさい。
彼が何か悪いことをしたとき..
あなたの夫を止めるのもあなたの義務でしたが、
あなたは、それをしなかった。

あなたの夫は傲慢に行動していて、他人を傷つけていました...
彼は、シヴァ神に、女神パールヴァティーをあきらめてもらうように頼んだ。

ヴリンダは大きな目から涙を流しながらヴィシュヌ神を見ましたが、
ヴィシュヌ神は、続けました。
「そのようなことをしても、彼が無事だったのは、
あなたの祈りが、ジャランダラを守っていたためでした。」

ヴリンダは、ショックを受けその場に倒れてしまいました。
そして、最後の息をして、亡くなりました。
ヴィシュヌ神は、彼の偉大なる信者の死に顔を見下ろしていました。

シヴァ神と神々がやってきた時、ヴィシュヌ神は、ヴリンダの傍に座っていました。
シヴァ神は、ヴィシュヌ神のそばに来て言いました。
「「彼女のために悲しんではいけません。
　彼女はトゥルシとして生まれ変わります...
　世界でも有数の薬草植物のひとつです...
　トゥルシの葉であなたを礼拝することがなければ、
　あなたへの祈りは決して完全ではありません。」

トゥルシー（薬草）の神話
Jalandhara and Vrinda ・The story of Tulsi

ヴリンダの呪いのために、ヴィシュヌ神の霊は、ゴミティ川の近くにある
『サリグラム』という石に　閉じ込められてしまいました。
これらの石は、ビシュヌ神の表象であるため神聖であると考えられています。
また、ヴリンダは、死ぬ折に、ヴィシュヌ神が、妻と別れてしまうように呪ったとも、
言われています、ラーマヤーナでは、その呪いのために、ヴィシュヌ神の化身
ラーマ神は、妻を大悪魔ラーヴァナにさらわれてしまった、と考えられています。

終わり。